

幼児へのラヂオ

—「幼児の時間」について—

日本放送協會教養部 森 本 勉

いろいろの意味で多くのハンディキャップを、重い負擔を懸けられてゐる現在の日本の子供たち殊に——幼児をさう取扱ふべきかは、日本文化の——そして日本國家の重要な問題の一つである。近來、國家が、社會が段々この問題を取上げて、夫れ／＼の立場から、幼児の哺育、養護等に關し各種の施設を講じつゝあるのは大いに喜ばしいことである。その中でも我がラヂオがその瞬速性、廣汎性を利用して、その對象の分野の重要なものとして、幼児(子供)を取上げてゐることは、高く評價されていゝと思ふ。

現在のわが放送部門に於て、直接、幼児を對象としてゐる放送種目は、夕方の所謂「子供の時間」を、學校放送に於ける「幼児の時間」である。唯前の「子供の時間」は、その狙つてゐる範圍下は幼稚園程度の幼児から上は小學校、更に中等學校の二三年、時にはそれ以上にも及ぶ廣汎な兒童層であり、自然、純粹(?)の幼児への放送割當ては少く、

又は範圍が明瞭を缺く場合も少くないので、こゝでは正面から「幼児の時間」を銘打つてある學校放送部門の「幼児の時間」だけを取扱ふことにする。

學校放送「幼児の時間」といふ名は、所謂學校と幼稚園とを區別してゐる今の教育制度からは、些か當を得てゐないが、「幼児の時間」誕生の始めから便宜的に用ひられ、今日に及んでゐる。然し勿論、學校放送「小學生の時間」は編成方針も異つて居り、利用せられる聴取側としても區別して考へられてゐるのである。

然らば「幼児の時間」は何を意圖し何を狙つてゐるか。單的にいへば家庭や幼稚園の保育の御手傳ひであること云へよう。但し少くとも、保育、訓育は、人格と人格の直接的交渉によつて、始めて最高度に目的を達し得るこゝを建て前からいへば、ラヂオは甚だ不完全な保育の手傳ひしか出來ないのである。聲と音との傳達機關に過ぎないラヂオは、

所詮教師や保母に取つて代り得るものでなく、利用者である教師や保母の、よき協力者として始めてその役目を果し得るのである。そしてそこに教具としてのラヂオ本來の意義があるのである。百聞一見に如かず云はれた、その視

覚作用を全然封じられて、聴覺のみに頼らねばならぬ不具の世界、然し、盲人が通常人以上の聽察力を持つ意味に於て、このラヂオは、音聲の世界に於ては、他の企て及ばない機能を有つてゐる。それこそ探つて用ふべき部分である。要するにわが「幼児の時間」の目的も範圍も、一に懸つて幼児保育の理念を、ラヂオの機械的特性との交錯點にあるのである。

以上を具體的な問題に結びつけて考へる時、「幼児の時間」放送の内容も形式も、第一にある規制を受けなければならぬ。たゞラヂオでは視覺が利かないから、たゞへ幼稚園令に園児指導總目として、遊戯とか唱歌、觀察、談話、手技數を擧げてあつても、視覺の助けによる作業、例へば遊戯とか手技などはまづ「幼児の時間」から除外されなければならぬ。ラヂオでの指導もやればやり得ないことはないが、困難のわりに效果的でないからである。又、最もラヂオ向きである唱歌やお話にしても、本質的な幼児の理解力の程度、又は想像や經驗の格段の差異なきを考慮に入れる場合、その取材の範圍も、内容、形式も、可なりの

制約を受けなければならない。

これだけの前提を頭において、さて日々實際に放送される幼児へのプログラムについて贅見を加へよう。

大體、現在、幼児の時間が實施してゐる放送内容を大別するに三種になると思ふ。說話を主とするもの、唱歌音樂それと劇化の形をみるものとの三である。勿論これらはいつも純粹なお話又はたゞ唱歌音樂として、單獨に演出されることは少い。そしてこの復合的な取扱ひ、立體的な取扱ひはラヂオに最も適合した世界であつて、お話し唱歌音樂擬音その他の音響效果の、渾然融合した世界にこそラヂオの生命があるのだともいへよう。然しこゝに便宜的にこの三つを別々に取上げて検討を加へることにする。

一、說話の形をみるもの。その内容は童話であり、お話であり又物語りめいたもの、單なる報告もあらう、訓話もあらう。いづれにしてもラヂオは常に聲音的に正しい發音、アクセント、を土臺として美しい言葉上手な表現（抑揚、調子）で放送されねばならない。ラヂオの幼児への說話は、飽くなき幼児のお話の欲求に當面してゐられる教師や保母諸姉へ御手傳ひの意味で新しい材料を提供する同時に、一面正しい話し方、よいお話の仕方についての一つのモデルを提示しようとしてゐるのである。教育的の意味をもつラヂオのあらゆる分野に於て、國語の問題、こゝば

の訓練は重要視されねばならぬと確信してゐるが、殊に幼児の時間に於けるこの問題は、最も慎重に取扱はれねばならぬ。それは音楽的訓練と共にラヂオの生命であること云つても過當ではないと思はれる。標準語とは何ぞやといふも頗る問題が錯雜してゐるが、少くも小學國語讀本が要求してゐる程度の國語——殊に話しことばについては、ラヂオは勿論保姆諸姉も重大關心を持つべきであると思ふ。童話、話し方につき兒童對象の多くの書物が書かれてゐるが、さてそれを聲音的にいかに發聲し表現するかといふことになるに、ラヂオは相當の偉力と効果を發揚し得る立場にある。例へば従來の所謂「はなし家」諸氏のお話しの仕方

は何らの批判反省なしに之を踏襲し追隨していつものかぎうか。子供たちが喜んで笑ふが、果してその笑ひが子供たちの純粹性を突いた笑ひ方であるかぎうか。幼児は話し手と共に或は驚き或は恐れ、或は悲しむがそれが明日の日本人にふさわしき感激であるかぎうか。それは一に話し手の洗練された感覺と教養に依るところである。勿論相手が幼児であるといふ條件から、押韻、反復、誇張、對立、漸層、比較等の技巧、それに要すれば伴奏擬音等の効果を加へることはあるが、それも必要にして十分の程度で、徒らに誇張に走り、喧騒に互ることを避けなければならぬ。現實の「幼児の時間」が必ずしもこの理想を實現してゐることは

云へないが、少くも當事者としての意圖はこゝにあるのである。

二、唱歌音楽。前述のことばの訓練と同じく又はより重要な部門である。唱歌音楽に關する國民的教養がラヂオの普及發達以來、急速な進展を遂げたことは萬人の認める處であらう。然し、何ぞ云つても國民の生活環境が歐米諸國に比し、音樂に恵まれること少かつたために、わが國上下の音樂唱歌に對する感受性、適應性はまだくゞ彼等の足下にも及び得ないのは残念ながら事實である。視覺の世界以外に廣い／＼聽覺の世界のあること、音樂の世界に遊ぶことその人間としての幸福を思ふ時は、そして幼児時代に於てこそ音に對する感覺の訓練が徹底し得ることを思ふべき、われ／＼はもつ／＼よい音樂を幼児に與へたい。或る人は四歳から六歳の間に於てのみ絕對音感の教育が可能だといつてゐる。少くも感覺のフレッシュな幼児時代に於てこそ、よき音樂を與へて彼らの心情を昂め、且耳の訓練をしてやりたい。そして吾々の經驗によれば、幼児の音樂に對する感受性は相當鋭敏である。よく子供にはこのオーケストラは程度が高すぎるといふことをきく。然し果してどうであらうか。一處にきいてゐる大人には程度が高いかも知れないが、案外、幼児には受用できるのである。スピーカーから洩れるメロデーにちつと聞き入るべき、自分たちの知

つてゐる歌曲に口をそろへて唱和するさき、或はリズムに合せて思はず知らず、頭を、手を、足を揺つて喜ぶさき彼らの眼は輝く。大人は、このピヤノは月光が降りそゞぐ處ださか、このフリユートはアルプス山中の朝の静けさを現すさか、理窟から音楽を知らうとするが、幼児はすべての感能を働かせて直接にきく。さちらが、音楽の鑑賞の正しい道であるかは明らかである。音に意味はない。意味は受用者が勝手に感得すればいいのである。但し大事なことは幼児は感能を再表現するこゝが、概ね下手であるか、又はむづかしいさいふこゝである。よい音楽をきいて幼児が「よかつた」さか「面白かつた」さか云はなかつたさいふこゝは、その幼児がその音楽を解しないさか、その音楽が悪かつたさか、いふこゝの證明にはならないさいふこゝである。音楽は萬國共通の言葉であるさいふ意味は、そのまゝ音楽は年齢を超越してゐるさいふこゝにも解せられる。この意味で幼児への音楽唱歌は、始めが大事であり、又決して俗悪、低級な重謠なきを與へて満足してゐてはならない處である。勿論順序は必要である。適當な手引きも大事であらう。然し決して子供の好む處にあつて、その純真にして新鮮な聽覺をスポイルしてはならないと思ふ。こゝに「幼児の時間」の「よい音楽」の意味と主張があるのである。最近「歌のおけいこ」を幼児の時間でも實施してゐるがこれも前

述の趣旨を具體化した試みの一つである。但し、子供の時間の「歌のおけいこ」は些か高學年向きであり、自然、曲に變化があつて歌はれてゐるやうであるが、「幼児の時間」のそれは純然たる幼児向きである。メロデーの奇を狙ふよりは、音域を幼児向きにして、歌ひ易く、而もその間、音樂的な想を盛る處に趣意を置いてゐるのである。歌手や音樂家を養成するを目的としない音樂教育に於ては、無理な發聲を強いるべきでなく、歌ふこゝを樂しむ生活、音を樂しむ生活、音樂唱歌を味ひ得る感能を啓培するに重きを置くべきであると思ふ。こゝに放送の主趣はあるのである。

三、劇化の形をさるもの。劇さいふものもラヂオの性能からいへば高々、ラヂオドラマさいふ一變形に過ぎない。而も幼児向きのものは唱歌劇にせよ童話劇にせよ、一方には多くの制限があり、而も一方にはラヂオドラマの規約を無視するわけにはいかない。例へば、子供の生活經驗は大人のそれに比し絶對的に貧困である。普通の劇の約束も幼児には通用しないし、語彙は少く、想像力も弱く、プロットを追求していく能力も弱い。而も幼児は全體としての劇を感ずるに同時に、又一寸した臺詞に妙な印象を残すものである。劇も分解して考へれば、お話し音楽と音響効果の綜合であるから、一つの言葉一つの音に感興を感ずるこゝを押へるこゝは出来ない。こゝに幼児對象の劇のむづかし

さが加はるのである。況や言語に言葉の訓練を考へ、音楽に高き情操陶冶を要求する立場からは尙更のことである。然し、そのために劇全體が低調卑俗であつてはならない。

さしまでも純粹で、優美で、而も香り高きものでなければならぬ。一部一部の効果もさることながら、全體として聽き終つた後で、子供たちの心を、魂を高めるものでありたい。小さな胸にホットした溜息をつかせることが出来たら上乘である。それが子供の生活にいかん裨益する處があつたかのみを要求する必要はない。況や聽取後の指導を稱して、何でも再現させたり、又は觀念的に批判を要求することは避くべきである。たゞ劇の進行中觀念の混亂を救ふため、適度の補助的役割を果して下さる。こゝゝ、誤り易き部分の批正は是非、指導者に御願したい處である。

以上、説話と唱歌音楽と劇との幼児向三放送態様につき、夫れ々の意圖を申述べたのであるが、實際問題としてこの三態様の區別は便宜的のものであつて、多くの放送はこの三者が適度に混化されてゐるのである。それは要するにラヂオの特性を最も効果的に活用するためであり、殊に幼児向の放送に於ては、この立體化はヴァリエターを追求する幼児の心情に即應するものなのである。むしろ表情なきラヂオといふものは、理論を追求する講演以外は、すべてこの立體化の形式をこるのが最も効果的である。さへ

思はれる。こゝでは言葉と音楽とが渾然として一體をなし、言葉を解釋することなしに、全體として聽くものゝ心に迫つてくる。さうなラヂオ唱歌劇、オペレッタ、ここにラヂオの最も効果的な部分が展開するのではない。かと思はれる、そしてこれは對象が幼児である場合には最もよく妥當するであらう。これらについて、昨年一月より三月に互つて、全國の幼稚園二十餘に依頼して、放送效果の調査をしたものゝ詳細なレポートが出来上つてゐるが、いづれ公表する機会があると思ふ。

尙幼児の時間に關して、度々問題になる問題に、時局と幼児教育といふのがある。ラヂオでも時々いろ／＼な形で時局を取扱つてゐるが、取扱方によほ注意しないゝ、徒らに殺伐な氣風を助長させるに終る懼れもある。況や日滿支親善、大陸經營の重大使命を負はねばならぬ第二第三の小國民に、支那に對する敵愾心だけを植えつける如き結果にならぬやう、一言一句にも要領が肝要であらう。「幼児の時間」では出征軍人に關するもの、軍馬、軍用犬、軍用鳩等に關する愛すべき且感すべき物語などを主として、間接に時局と事變に觸れるに止めてゐる。

以上「幼児の時間」について、あまり抽象的な論に走り、まだ述べ足りず、觸れ残した問題もあるが、これを機會に「幼児の時間」放送につき實際家特に幼稚園の保姆諸姉の御高見を伺ひたいことを御願ひして筆を擱くこゝとする。